

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005
東京都東大和市高木 3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU !

無料

第61号

毎月発行

発行 2017年(平成29年)6月16日 金曜日

2017年(平成29年)6月16日 金曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、63歳、経営
コンサルタント、趣味は、縄
文文化研究、この2月に株
式上場プロフェッショナルを
養成し、IPOの経営者教育
も行うスクール『IPOマス
タースクール』を開校、校長
就任



日常復帰への苦闘

大震災から6年を過ぎた被災者と避難民の 方々の心情をあらためて考える②

前号では、筆者の日常崩壊の小さな体験を通し、深い井戸の底から青空を見上げるような思いで、被災者の方々の心情を想像してみようという不遜なことにあえて挑戦をいたしました。そうしたことでもしないかぎり、被災者の方々の心

情は微塵も分らず、入り込めず、心を通して交流することも出来ないと考えたからです。とはいえ、壮絶な被災体験は外からはまったく分かっていないことも十二分に承知しております。その点をご理解いただきたいと思

今回は、前号に続き、あの大震災から6年以上経過したいま、またはこれまでのプロセスのなかで、どうやって日常へ復帰していくのか、いったんのか、あるいは永遠に復帰できないのかを、想像させていただきつつ、この記事を書いていきたいと思います。

突然の死、徐々に死ぬ 近親の死は悲しく悲惨な体験ですが、それでも、重篤な病気で徐々に弱っていく、そして死に至るとい

また筆者の個人的な体験から話を開始したいと思

筆者は、いまから約九年前に突然母を亡くしました。それまで重篤な病氣もなく、突然の死でした。心

計報を聞いたときは、きつと何かの間違いだと思

ました。現実として受け入れることが出来ません

しかし、実家に帰り、遺体と直面したとき、受け入れざるをえませんでした。そこからは、自らの親不孝の数々を思い出し、取り返せない過去を悔やみ

た。自分の親不孝が母親の命を縮めた自分を責め

た。遺族にとつて、近親の突然の死は、大きな喪失感をもたらします。その喪失感とは、心がぎれてしま

り、その経験は初めてでした。近親の死は悲しく悲惨な体験ですが、それでも、重篤な病気で徐々に弱

っていく、そして死に至るとい

う、そして死に至るとい

う、そして死に至るとい

最も身近な肉親の死、親族の死、知人や友人の死という二度と取り返し

つかない体験をして、人間は生きて行かなければ

なりません。この均衡を守り続けるには、大

変な精神的努力と労力を要求されます。例え

ば、仮の日常を身にとつた自分と、悲

しい心で深い傷を抱え

たまま、顔を洗い、朝食をとり、たわいもないTV番組も見

候の話などを交わす日常を取り戻さなければ

なりません。大震災から数年という期間に蓄積された心の疲労は

ピークに達していること

でしょう。特に子供が大変な状況に追い込ま

れているよう

です。最大の犠牲者を出した宮城県石巻市では、多くの問

題が報告されています。ある中学生の話として、亡くなったとき

の遺品を持って学校に通い続けていたが、「自分が死ぬ

ばよかった」と中学進学後にリストカットした事例も報告

されています。また、亡くなった子供への思いが強い

あまり、生き残った子供が頑張りつつも「天国からき

ょうだいが助けてくれた」と、亡き子供を中心

に考えてしまうよう

です。そのため、

生き残った子供は、

褒められることが

なく、自己肯定感

が弱体化していく

という悪循環に陥

っているよう

です。逆に、生き

残った子供か

ら離れたくないと、

登下校



水揚げしたばかりのホヤ

来年に【ホヤまつり】を開催予定 新鮮でおいしいホヤを食べて 国内消費を大きく伸ばそう!

三陸の珍味であるホヤは、この新聞でもたびたび取り上げ、また「三陸酒海鮮会」でも幾度となくホヤ料理を提供して、出来る限りホヤのPRをしてきました。とはいえ、まだまだホヤの認知度は高くなりませんし、ホヤファンはそれほど増えていないというのが現状です。

その理由の主なものとしては、残念ながら、過去にあまり新鮮ではないホヤを食べた結果、ホヤ嫌いになってしまった人たちが多すぎるようです。ホヤは、ここ数十年間、国内消費はどんどん落ち込む一方で、その代替としての近隣諸国への輸出構造がすっかり定着してきました。加えて、六年前の大震災後の福島第一原発の風評被害で、最後の砦の輸出も大きく減少しました。



新鮮なホヤの酢の物

来年は「ホヤまつり」しかし、うれしいことに、大量廃棄のニュースに心痛め、ホヤのこうした状況をみかねて何とかしようという方がたくさんおられることが分かってきました。そこで、当新聞では、こうした方々とともに、来年にはぜひとも【ホヤまつり】を企画開催しようと思いを立ちました。

この計画を周囲に言い続ければ、後には退けなくなると思われ、現在たくさんの方々の機会を利用し、多くの方々に、この【ホヤまつり】を事前PRしております。また、この【ホヤまつり】への協力のお申し出もすでに集まっております。新鮮なホヤ提供と豊富なホヤレシピ これから具体的な構想を練り上げてまいります。ポイントは二つです。最初は、なんとと言っても新鮮なホヤの提供です。ホヤは、とても繊細な食物です。水揚げしてからおいしく食べられる期間が想像以上にとても短く、そのため、輸送に日数を要する地域への販売はとてむずかしいのです。

この問題をクリアするためには三陸のホヤ生産者の方にご協力をいただくことにいたしました。次は豊富なホヤレシピですが、ホヤ料理は刺身や酢の物だけではなく、現在いろいろなおレシピが開発されています。これも【ホヤまつり】で提供しようと思っております。そして、ホヤを通じた新たな三陸復興支援を実現してまいりたいと思っておりますので、ぜひ来年をお楽しみください!



【完成品】

第34回 水産業再興のための 料理レシピ紹介

三陸沖の銀鮭 を使った 《銀鮭のムニエル》



【銀鮭切り身】



郷土料理愛好家
松本由美子氏

一簡単レシピ

【材料】 鮭2切れ 塩、コショウ 少々、酒 大1、小麦粉大2、バター 10g

【作り方】

- * 鮭の骨、皮を取り塩・コショウ、小麦粉をまぶして冷蔵庫にしばらく入れます。
- * フライパンにバターと油を敷き、鮭を入れて中火でこんがり両面を焼きます。



写真でお伝えする

写真撮影：尾崎匠

東北の風景（登ってみたい山）



連載
むかしばなし



第四十九話

(最終回)

「あなたの、あの辻で」

泰衡は、突如自分と少女が巨大な洞窟の入口に出た事に気づいた。そこは縦横に巡らされた堅固な柱と天井で塞がれている。

「何と・ここは、達谷窟ではないか！」
平泉の西南に遠からず位置する、古代蝦夷の砦跡。

「まあ、そんな遠くまで」
若は、正気に戻っていた。どうやら、あの猛々しき野心の女・阿古耶姫はその身から離れたようだ。



奥羽越境現象氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出沒し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

「た。若どのが、元の時代に還る事ができなくなる」

「ああ・もう結界は完成したのかしら。皆、もう無事に還れたでしょうかね」

「三姉妹を呼び戻そう。」
「いえ、泰衡さま。ご自身の事を優先させて下さい」

「いや、しかし。」
「私も、実のところ平泉の都を見ておきたいのです」

泰衡は少女の大胆さに驚いたが、その横顔に、迷いは微塵も見られなかった。

「イアンパヌ、この様は」
トヨは爆音と煙の中、客車の屋根に立つ女に訊く。

「結界は宮城野の柿の精力に変化を与えた。その実を口にした者の記憶と心象を投影して、結界内に強い現実感をもたらす幻術だ。」

長里国八郎が眼鏡を灰で真っ白にしながら叫ぶ。

「しかし・この光景は。仙臺が、かような破壊に臥した事など、嘗てないぞ」

「私の三十人の姉妹らが覚醒して、五人ずつが組になつて結界六地点にいる。西で東の暁を鏡に受け、他の五地点の鏡に送った最後の東からの反射が、この光景

・都、第一の死の姿よ」
善助が問うた。

「三郎君は・忠衡公ほどうされたらうか。」
「北へ向かったわ。義兄上様をお救いする為にね。トヨも早くここを出なさい。貴女の新しい時代は、やはり北にしかないのよ。」

もはや、芭蕉らが自分の手指よりも大きく感じられるほど、喜善と賢治の身体は元の大きさに縮みつつある。それは即ち、一発の爆弾に命を奪われるという事。汽車も、既に庇いきれない。芭蕉さん、行きましよう。娘は大丈夫・必ず昭和へ無事、還つてきましよう。喜善は振り絞るような声で、言った。怪僧・芭蕉は頷き、ラヂオの接続を繋ぐ。「トヨ殿・さらば！」
芭蕉の惜別の叫びに、女が、こう返した気がした。「また、会いましょう・あなたの、あの辻で！」

もを集めよ。合議を開く」居合わせた武官らが大通の向こうへ駆けていく。都市平泉の景観は、壮麗を極めていた。おそらく昭和の時代の誰一人、ここまでの古都の繁栄を想像し得ていないであろう。少女の目にも、後世に名高い無量光院の姿だけは判った。馬上にてその幻の如き美観に圧倒されるうち、すぐ向かいの藤原の居館に入った。泰衡の正室にもてなされ、荘厳な屋敷にしばしばくつろいでいると、早くも合議の知らせが届いた。若が同席できるはずもなかったが、泰衡に政庁へ案内され、大広間の襖の陰から議会の様子を垣間見る事が許された。奥羽各地の首領らが居並ぶ中、河田次郎が進言する。「この河田守継、泉様が命により、御館を出羽比内へお連れ申し上げ奉る。」
「なに・三郎の命とな」
若は知っている。藤原氏累代の家臣・比内の河田次郎が泰衡を裏切り、その首を頼朝に届ける、という史書の記述を・泰衡を制止すべきか？同行し真実を見届けるべきか・否、自分如きに歴史を変える資格があるか。

頼朝は草原に突つ伏した格好で、目覚めた。辺りは全くの原野で、一面に倒れた己が夥しい兵たちも、同じように皆果然としている。先程までの地獄絵図は一体、何だったのか？単なる幻影とは到底思えない。「足利・又太郎忠綱！」
叫ぶと、化け物の下僕を失った長身の僧侶が身体を引きずるように来て、跪く。「ここ国分ヶ原に留まり、限なくこの地を檢分し、報告せよ。今日より、国分とでも名乗るが良い。」
頼朝は大軍に下知した。「多賀城へ入るぞ・奥州征伐の、仕切り直しじゃ」
又太郎は、足元の土を凝視し、やがて一塊、掴み上げた。立ち上がり、周囲を改めて眺め回すと、もはやそこは誰の影もない、彼だけの新天地なのであった。

泰衡による都市平泉の一斉撤退活動は賑やかに、盛大に行われた。それはしかし、決して慌しくもなく、人々は哀しげではあっても潔さ、爽やかさすら感じさせた。泰衡は、少女に語って聞かせる。
「我ら蝦夷にとつて、都市とは何であるべきか・平泉は奥羽全土を富で潤す為に皆が集まり建てた都。トヨ殿の邪馬台国も同じであった。撤収は惜しくない」
出立の日は来た。平泉を去る人々を見届けてから、と思つた泰衡を、平泉市民は総出で見送りに立った。泰衡と若、そして千人にも上る従者とその家族らの為に、人々は道という道を埋め尽くしながら静かに彼らの旅路を開けていく。

若の背中も、まだ痛まなかつた。秋深まり紅葉に燃える山々の間を行きつては野営し、三日目の夕方には鹿角の桃枝という集落に入る。「ここはトヨ殿が奥羽を治められた古代、ここが全の始まりとなったという因縁の土地。」
ここで泰衡は平泉以外に寄る辺のない家臣ら百人余りを一行から離脱させる。いよいよ、比内に入るのか・若が心休まる時を持たぬまま一行は河田次郎守継の抛・比内の地へ入った。そこで待っていたのは、何と泉三郎・忠衡であった。「兄者、大湯へ入れよ」
忠衡と河田はその夜、若も同席する質素な晩餐で、そう進言した。大湯には昔て古代の石組装置群があり、それは北東の火山・十和田の大噴火によって灰の下へ埋没した。三百年ほど昔、かのアテルイ死して約百年後の事である。

遙か昔、津軽の蝦夷が朝廷の侵攻を受けた遠く南、白河の同胞へ救援に駆けつけた・その時にも使われた、瞬時に遠距離を移動できる森の洞道なのだ。そしてあの男、芭蕉もここから跳んだ・忠衡は説明する。「宮城野に敷かれた新たな強い結界だが・この円形と、大湯の円形群との組み合わせを計算する事で、彼の地へ降りる時間の調整が可能なる事がわかった」
「では・若どのを七百年後の、元の世界へお返しする事ができるのだな。」
若は言った。
「泰衡さま・貴方は、私に平泉を見せて下さった。私は貴方に、仙臺をお見せしたいと思うのです。」
忠衡がニヤリと笑う。
「兄者、後の奥州は任せて、駆け巡ってくるがよい。」

膨大なる時間の海を越えていく汽車の乗客らの耳に、あの柿の精・丹十郎の事が響く。ほんの、東の間の事。「俺の実はお前様方へ選り取りを平穩に送るためなら、一切忘れれば、元の時代で天寿を全うできよう。忘れなくてはならぬ、遠からずまた大天狗の領界へ招く事になる。それは一見、死にも似ていようが。」
「はは・選択の余地などないではないか」
機関士が笑った。多くの乗客達も・そして次の瞬間、列車は遂に、あの時代の鉄路上に戻つたのである。
車窓には、六月始めの爽やかな風と、北都の賑わいが届いていた。今純三が横に座る青年の顔に仰天する。「おお！？守隅くん、帰ってきたのか」
大天狗綾糟がその姿を借りていた、守隅全克である。「はあ・ご心配おかけしました。今さん、実は僕、銀行辞める事にしまして」「そりやまた唐突だね。」「綾糟さんに身体をお貸ししている間ずっとですね、見せられていました・ご先祖の生き様とか、死に様とか。もう、何と言うか」「まさか、覚悟を決めたのか。芸術家として死ぬとか？よしなさい、勧めない」「はい。何卒、今後ともご教示下さい。今先生！」
決意した若者に聞く耳など残っていないはずもない。

祝魚は、最後尾の客車から過ぎ去る枕木を見ていた。「皆、忘れてしまったか」
当然の事だ。祝魚は思い、苦笑した。ここでの元の暮らしを平穩に送るためなら、なのに、自分は忘れない選択を取つた。何故だろうか？憶えていて、何になるのだ。「いたね、探したよ」
東京・吉原の火災を生き延びた遊女・本子である。「え・お前まさか、憶えてるのか、向こうでの事」
「当たり前じゃん。あなたもでしょ、わかつてたよ」
「どういう事だい」
「やっぱり小田原遊廓へ行って、楼主と刺し違えてもする覚悟なんですよ・本当、ばかなんだから。」
そういう、お前はどうかの。
「死んだら、どこへ行くんだらう俺達は。お本さん」
「さあね。青葉山の犬天狗様の、導くがまま・よ」
賢治は、喜善の内心を氣遣つていた。何しろ、愛娘を七百年も昔の世界に置いてきてしまったのだから・「産業博覧会・明日が最終日だね、宮澤くん。」
喜善はしかし、飽くまで明るく振舞うのだった。
「ええ、よろしければ一緒にしませんか、喜善さん」
仙臺駅から西へまっすぐ伸びた大通り。無数の幟と商人たちの氣勢、路中に溢れる人々で空前の活況を呈していた。だが、これは暗い世相の裏返しなのだ・「佐々木殿、宮澤殿！」
前方の人込みから、呼びかけられて、ハツとする。「ああ・ここは、かの」
豪壮な瓦屋根と、天を突く洋館の塔。その際立つて美しい十字路、芭蕉の辻に怪僧は立つていた。その傍らに、石川善助・そして「お若子・おかえり」
喜善は娘の無事な、そして元氣な姿を認め、破顔一笑し思わず駆け出していた。宮澤賢治が山高帽を脱ぎ、少女の傍らに立つ直垂姿の男に敬意を示すと、彼、藤原泰衡の顔にも凛々しい笑みがかげられるのだった。

東北大震災発生から6年後以降の被災地自らの復興活動と復興支援活動のあり方についてより根本から大胆に考えてみる

*(注)

筆者はあえて「東北大震災」と呼んでいるので、けつして間違いいではないことをまずお断りしておく。さまざまな観点から、いまあらためて考えてみても、その命名が正しかったと思える。

①六年三カ月後の今考えること

東北大震災から六年三カ月経過した今だから考えることができることがあるはずである。

当然ながら、震災直後に考えて実行することもあり、それが落ち着いてしばらく

してから考えて実行すべきこともある。明確に分けて検討すべきと考える。

いま概観すると、応急措置は一段落したと判断できるので、なおさら区分して考えるべきである。

振り返ると、震災直後にまずなすべきことは、ライフライン確保であり、ここは何とか乗り切ったと評価できる。

その次は、目先のインフラ復旧であったが、ここはまだ大分遅れている被災地もある。すでに復旧したといえるところもある。被災の度合いによるし、また福島第一原発に関連する地域特有の問題もある。

では、いま考えて実行することとはなんだろうか。

一方、被災者の心の問題はまさにこれからであり、その考察は前号、今回号で一部触れたので、そちらを参照していただきたい。

②復旧から復興フェーズへの大転換

ひとことで表現すれば、復旧フェーズから復興フェーズへの転換である。

筆者が考える復興とは、震災前に比べると大きく崩れてしまった被災地域の暮らしの根本的回復であり、震災発生前から大きく落ち込んだ地域経済の復興もあるし、産業の再構築もあり、震災前の姿を復旧するのでないさまざまな挑戦的な試みの具体的な実現もある。

当新聞の復興期間に関する基本スタンスは、どんなに短く見積もっても、十数年以上であり、普通のペースで行けば、三十年程度を考えた方がよいだろう。このスタンスからすれば、六年三カ月という期間は約五分の一に相当し、残りは五分の四、八割である。まだ先が長い。

下がったからといって嘆いている場合ではない。そんなことでは、あと十年もしたら大いに後悔することは間違いない。大局から現在を捉える発想が不可欠である。

さておき、まず、被災地から避難している人々がまだたくさんいることがある。そして、避難生活が長くなり、避難地が本拠となり、元の場所には戻らない被災者が多くなっていることもある。当然のことである。

③復興支援人材

本格的な復興には資金も必要だが、それ以上に必要なのは人材である。この点で現在、複数の問題があることも確かである。一昨年の日本創生会議による地方の人口減少予測は

しかし、本格的な復興に多くの人材が必要ないというまでもない。

④移住政策オンリー

今年(平成29年)の二月二十五日(土)に、日本政策金融公庫が、東北6県との共催により、東京都千代田区において、「東北で創業・事業承継・就農+移住+定住」東北6県移住応援イベント「in 東京」を初開催した。

地方創生運動の一環である。一極集中は正しく大賛成である。

そこが大震災復興をからめた企画として、目指す方向にも賛成である。

筆者もそこに参加して、複数の東北各県の中核都市の担当者や短時間ではあるが意見交換をした。

各担当者は、大きな声ではないえんが、本音を言えばそう思うと答えたのにはこちらが驚いた。

大都市圏に居住して復興支援に興味ある人々は、復興支援はハードルが高すぎると思っっているであろう。そうした支援希望者はたくさんいるはずで、中核都市の移住促進担当もその

しかし、復興支援が目的でなくとも、移住が簡単に決断できる人は限られているであろう。

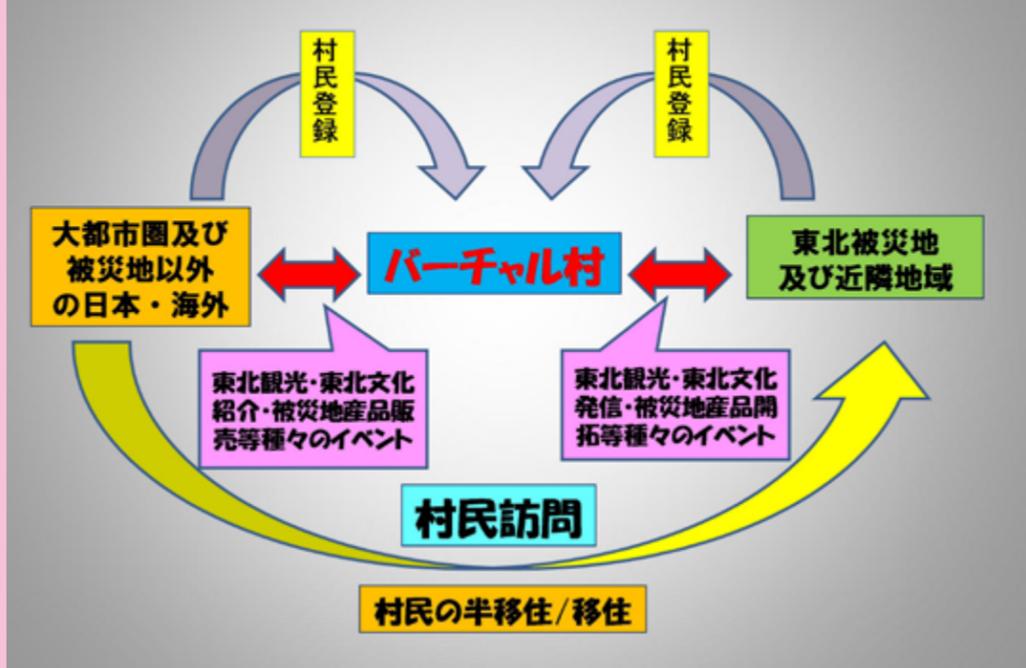
筆者の知る限りでも、この大震災以降、移住を決断したのは二人だけであり、両名とも若い。

やはり、どう考えても、発想が安易過ぎると思う。柔軟性に欠けていると言わざるをえない。もつと懐を広げた施策が求められていると感じた。

⑤みやぎ移住フェア

そんな折、FACEBOOK

東北被災地に設立可能なバーチャル村の構造



「被災地に作る『バーチャル村』イメージ



みやぎ移住フェア—石巻アフター交流会の様



みやぎ移住フェア—石巻アフター交流会の様



日本政策金融公庫の東北移住促進パンフレット



復興支援の拠点としての三陸酒海鮮会

で知り合った、一般社団法人「SHINOMAKI2.0」に所属し、最近東京から宮城県石巻市に移住したという矢口龍太君という若者に、先月十四日に「みやぎ移住フェア」石巻アフター交流会」に誘われた。

さまざまな話をして、時の経つのも忘れるほど楽しかった。そこでも移住と半移住の投げかけを試みた。突然の提案だったためか、明確な返答はなかった。

⑥半移住から「バーチャル住民」へ拡大

復興関係者には、前述のような半移住という考え方ももつと真剣に考えてもらいたいものだ。これならば、今の生活の何もかも捨てて移住しなくても済む。どちらでも多く暮らすかの比重も人それぞれに任せれば良い。助成金からむと、前述の安易で強引な発想に引きずられるが、それを断ち切るべきである。目的は人材を集めること

であり、被災地の人口を増やすことではないことを肝に銘じる必要がある。ならば、もつと発想を進めて、被災地に移住どころか、半移住もしくても良いではないか。それは、現在の居住地に居ながら、バーチャルな被災地住民となつて、バーチャル空間で交流し、たまにはオフ会と称して、リアル空間でも交流するのである。この考え方は、当新聞四十五号一面でも記事にした。

事業企画提案!
『東北んめえもん開発』
“んめえもん”を東北内で独占せず高付加価値化で販売



普通より小型の毛ツブ

きると考えるので、ぜひ何らかの形で実現してもらいたいものである。必要ならば、多方面からの協力もしたいと思う。

⑦新たな食品市場開発としての「東北んめえもん開発」

話題を転じて、大きく落ち込んだ地域経済の復興、産業の再構築という観点からは、前回号で提言した「東北んめえもん開発」という事業提案がある。被災地は震災前、水産業を主な生業としていたところが多い。慣れ親しんだ水産業を活かして、地域経済を復興する方法はないか、新産業を企画できないかとずつと考えてきた。

⑧交流の場参加継続

とにかく、時間の許す限り、さまざまな復興支援の場に積極的に参加することを心がけていこうと思う。特に、若手との交流は楽しいし、何かを創出するエネルギーに触れるだけで、こちらが元気になる。「若者、ばか者、よそ者」ということが復興支援でよく言われてきたが、筆者はこれこそ復興支援のキーワードだと考えている。こうした人材を集め、被災地で何かを産み出せたら、



復興バー銀座・石巻ナイト



復興バー銀座・石巻ナイト

これ以上幸福なことはないし、目に見える被災地貢献が可能となる。そんなことで、これまで何度か参加した「復興バー銀座・石巻ナイト」に今月十日に参加した。旧知の支援者や初めてお会いする関係者と挨拶しつつ、宮城の地酒を堪能しつつ、意見交換をした。

⑨復興支援の拠点としての三陸酒海鮮会

交流の場といえば、筆者の最初で最大の拠点は、「三陸酒海鮮会」である。さまざまな人々がこの会に参加するが、もう五年目に突入した。一月半に一回



復興バー銀座・石巻ナイト



復興バー銀座・石巻ナイト

の割合で継続開催してきて、今月十七日で二十八回目となる。これまで何人の人たちが参加したのか勘定もしていないので不明だが、これからもここを一大拠点としつつ、派生的に、さまざまな交流の場に参加していこうと思う。

会の趣旨は、当初、あまりハードルを高くしても長く続かないだろうということで、気軽に参加できるように、東京に居ながらにして、三陸海鮮を食べ、東北地酒を飲んで間接的な復興支援をしようという敷居の低い会であるが、いつも話の内容のレベルと志は高い。